Ann. Rep. Asahikawa Med. Coll.
1986. Vol.7, 59～82

ロールシャッハ・テストにおける陰影をめぐる基本的諸問題

── Exner による総合と整理を中心として ──

井手正吾・岩淵次郎

はじめに

Rorschach, H（1921）を原点とするインクブロット・テスト，いわゆるロールシャッハ・テスト（以下，ロ・テストと略す）には，Klopfer, B. や Beck, S. J. をはじめとする諸家による技法体系があるが，それらの体系での分類や意義づけには，諸家の理論的背景の違いもあり，種々の見解の相違がみられる。とりわけ，Rorschach の原著にみられなかった陰影に関連する反応については，他のどの決定因より様々な分類や意義づけが提唱されており，見解の統一がみられず最も混乱した分野といえる。そして Schachatel, E. G.（1966）の指摘するように，“種々のスコアや意味を付された割りには，それらの意味を経験的に実証し，それがなぜそうした意味を持つかを説明できる理論を構成する試みはほとんどなされていない”状態にある。

このような状況において Exner, J. E. は，まず Beck と Klopfer の技法をとりあげ（Exner, 1966），次いでこのふたりに Hertz, M. R., Piotrowski,Z., Rapaport, D. を加えた米国の５つの体系について比較しそこにみられる共通性や相違点を詳細に検討した（Exner, 1969）。それらを踏まえて彼は，1974年に従来からの種々の体系の総合を図って自らの体系“Comprehensive System”を公刊した。“Comprehensive System”はその後も着実な展開をみせ（Exner, 1978：Exner & Weiner, I. B.，1982）米国での主流となりつつあるが，そのなかで彼は，陰影に関連する反応について，そこにみられる問題点を整理分析し，さらに彼自身の新たな知見も取り入れてより総合した分類と意義づけを行なっている。この Exner による総合は，陰影に関する現状の混乱にひとつの統一をもたらすものと期待されるところである。

本小論は，ロ・テストにおいて最も見解の錯綜している陰影に関する反応について，ま

ずその歴史的な動向を概略的にたどることによりそこにある基本的な問題点を再確認し，その問題点に具体的な解決を図ったものとしてのExnerによる分類と意義づけを概観し，それに若干の考察を試み今後の礎とするものである。

従来の見解

ロ・テストの歴史と陰影反応

まず，ロ・テストの発展とその中での陰影反応についてEllenberger, H. F. (1954, 1981), Exner (1969, 1974)，長坂 (1958)，堀見・杉原・長坂 (1958)，片口 (1960, 1974) 等を参考に，その歴史を概略的にたどってみる。

周知の通り，ロ・テストはHermann Rorschachが1921年に公刊した著書 "Psychodiagnostik" と10枚のインクブロット図版を基盤として今日の展開をみている。その著書は荒削りで泥臭いながら人間心性についての独創的で今なお発展性を秘めた着想が含まれたものとして，また，そのインク・ブロットは臨床的価値のみならず芸術的にも優れたものと評されるところでもある。国際的にも広く用いられている現行の図版，つまり，その時から刊行されている図版には色合いの濃い薄い，色調の微妙な変化，すなわち陰影を有している。しかし，同時に出された著書において，Rorschachは反応の決定因として形態，運動，色彩をあげているが，陰影に関しては何も言及していない。これは，現在の図版にみられる陰影は，彼が本来作成し用いていた図版にはみられず，印刷の段階での不手際により生じたものであるためといわれている。その時点で，Rorschachは陰影について言及をなしえようがなかったのである。もっとも，この偶然的な出来事により，図版の臨床的ならびに芸術的な価値が高められたことは否めない。その後間もなく，図版のもつ陰影の効果は，決定因のひとつとして位置づけられていった。

ロ・テストは米国において理論的にも応用的にも飛躍的な展開をみているが，それは，1930年代後半から1940年代に，BeckやKlopferを中心とした諸家が，Rorschachを原点としながらも，各々独自の技法体系を発展させ現在みられる主な体系を確立させたことを基盤としている。それらの体系において，既に陰影は決定因のひとつとして確立されていた。しかし陰影についての分類や意味づけに関しての諸家の見解は様々であり，そこに共通点を見いだすのは非常に困難とさえいわれる状態であった。その後，各々の体系に基づいた陰影反応に関する研究は少なからずみられたが，Schachatelの指摘のごとくその基本的な分類や意義を検討するような研究はほとんどなく，見解の統一をみないままになっている。

一方，本邦においては，米国に約20年の遅れをもって1950年代後半より1960年代に，1958年のRorschachの原著の邦訳"精神診断学"の刊行と"ロールシャッハ研究"の創刊をはさみ，今日のロ・テストが基礎付けられたといえるだろう。それは米国における展開，

特にその主流となっていたKlopferの体系の導入が中心となっている。陰影に対する決定因もその動向から外れたものではなく，Klopfer法の分類が主に定着している。そのKlopferの陰影についての分類や解釈に対しては批判が多いが，名大法や阪大法にいくらかの修正がみられるものの，これまでに陰影に関する基本的な問題は特に検討も整理もされぬまま現在に至っている。

初期の見解

最初に陰影について検討を行なったRorschachとそれに続いたBinder,H.の見解についてみていくが，これはPiotrowski (1957)，Schachatel (1966)，辻 (1978)，片口 (1974) 等を主に参考としている。

Rorschachは，印刷段階で新しい要素が加えられた図版を手にしてから翌1922年に他界するまでの短い期間に，図版の陰影のもつ意味について検討を行なっている。彼の陰影についての見解は，彼の死後，Oberholzer, E.によって1923年に発表されたRorschach自身の論文やSchneider, E.の1937年の論文により公にされている。Rorschachは，まだ明確なことは分かってないと慎重に断わりながら，陰影が情緒的適応に関連し，“臆病で注意深く，適応力が妨げられていることを示している。さらにそれらは，他人のいる前での自己統制，他人がいるときに統制しようとする基本的に抑うつ的な素質傾向を示す”(片口，1974より引用）と述べている。そして彼は，陰影反応に対し“F(Fb)”（英語では“F(C)”とされる場合がある）というひとつの記号を与えている。また彼は，黒－灰－白色が色彩として用いられる場合や，陰影が通景的な効果をもつものとして知覚された反応についても簡単にふれている。Rorschachの見解についてPiotrowski (1957) は，“〔彼の陰影にたいする解釈には,〕抑うつ，用心，情緒的興奮と結びついた臆病さ，不十全感がみられ，これらはすべて抑止に集約される”とまとめている。Rorschachの残した見解は，断片的であるものの，きわめて含蓄深いものと評価されている。

最初に陰影についての体系的な整理を試みたものとして，1933年のBinderの研究がとりあげられる。彼は陰影に関して2種類の記号を作ったが，その分類は明暗の程度と認知の仕方の違いに基づくものといわれる。そのひとつは“Hd”（英語では“Ch”とされる場合がある）であり，これは，陰影のもつ拡散的な全体的印象が，不快な感情を伴った内容にむすびついた反応である。概して，全体反応になり，FHd，HdF，Hdの下位スコアが設けてある。「暗闇」「黒雲」などの拡散反応が主となるが，材質反応などの一部も含められている。いまひとつは“F(Fb)”であり，これは分化した陰影の知覚が形態と結びついた反応とされている。これは“Hd”と逆にほとんど部分反応となり，かなり形態質の高い材質反応や通景反応に適用されていたようである。Binderは“Hd”を浸透した不快な気分の存在ととり，病理群に多くみられるとしている。逆に“F(Fb)”は，

繊細な感受性といったものに結びつけ健常者にみられるものとしている。このふたつの記号を与えた反応以外にも，無彩色が色彩として用いられる反応や，陰影による輪郭（contour）が形態として扱われる反応があることも指摘している。Binder の分類は，領域，反応にともなう感情，さらに形態質などとも組み合わされたものとして理解され，決定因という基本的な分類としては明快さを欠くという点で疑問がもたれる。しかし彼の業績は，陰影を決定因のひとつのカテゴリーとして確立させた点で評価される。

現在の体系での分類

現在みられる体系での陰影反応について，特に Exner (1969, 1974)，辻 (1978)，その他，各体系の文献（Klopfer et al, 1954 ; Piotrowski, 1957 ; Rapaport et al, 1968 ; 片口, 1974; 堀見・辻他, 1958など）を参考として，その分類を中心に通覧していく。

表1.主な体系での陰影に関連した反応についての分類

体系	分類記号			
	概括的分類カテゴリー			
	材質	通景	拡散	無彩色
Rorschach	F (Fb)			
Binder	F (Fb)		Hd FHd,HdF,Hd	
Klopfer	c Fc,cF,c	FK K・KF	k Fk,kF,k	C' FC',C'F,C'
Beck	T FT,TF,T	V FV,VF,V	Y FY,YF,Y	
Hertz	c Fc,cF,c	(C) F(C),(C)F,(C)	Ch FCh,ChF,Ch	Ch' FCh',Ch'F,Ch' Ch'' FCh'',Ch''F,Ch''
Rapaport	(C) F(C),(C)F	Ch FCh,ChF,Ch		C' FC',C'F,C'
Piotrowski	c Fc,c		c' Fc',c'	Cw FCw,CwF,Cw
Phillips & Smith	c Fc,cF,c	V FV,VF,V	C' FC',C'F,C'	
片口法	c Fc,cF,c	FK K・KF	k Fk,kF,k	C' FC',C'F,C'
名大法	T FT,TF,T	V FV,VF,V	Y FY,YF,Y	C' FC',C'F,C'
阪大法	T FT,TF,T	K FK,KF,K	c Fc,cF,c	C' FC',C'F,C'

米国において，Binder 以後まず陰影についてのカテゴリーを整理したのは Klopfer であり，ついで Rorschach に忠実であった Beck も陰影の決定因を設けた。この2人をはじめとする諸家の陰影に関連した反応についての分類記号を，Rorschach と Binder も加えて表1に示す。表にみられるとおり，用いられている記号は多種多様であり，同じ記号でも，Rapaport と Hertz の“(C)”や Piotrowski と Klopfer の“c”などのようにその意味するところがまったく異なる場合もある。また，類似した分類でも，その基準には多少とも相違がみられる。しかし，これらを概括的にまとめると，4つのカテゴリーに分けられる。すなわち，黒灰白系の色を色彩として用いた無彩色反応，陰影を触覚的な材質として知覚した材質反応，陰影から遠近感や奥行きを知覚する通景反応，その他のより一般的な明暗の印象に基づく拡散反応である。

Piotrowski は，これらの体系の中で最も特異な分類をおこなっている。彼は，無彩色も含めて3つの記号を用いている。“c'”と“c”，ならびに“Cw”である。“c'”は，暗い陰影を用い不快な感情を伴うような反応である。主に黒い色を色彩として用いた反応が含まれるが，「嵐の雲」，「暗い洞穴」といった反応も含まれる。“c”は明るい陰影をより分化した用い方をした反応とされる。材質反応や通景反応の多くが“c”にふくまれる。“Cw”は白色を色彩として用いた反応で色彩反応に近いものとしているが，“c'”に相対するものとして色彩反応から分離している。他に，灰色を純粋に色彩として用いた反応に対して“Cg”の記号を一応あてているが，これは色彩反応に含まれるものとしている。彼は，狭義の陰影反応の“c'”と“c”を潜在的な不安の指標ととらえ，このふたつの分類はその統制に関連するものとしている。すなわち，“c'”は外的行動を増加させること（“闘争”）によって，一方“c”は外的行動を減じること（“逃避”）によって，恐怖や不安を軽減する傾向を示すものと仮定している。Piotrowski の陰影のとらえかたは，Rorschach と Binder の見解を発展させたものとして興味深いが，彼の分類は，Binder と同様になお基本的な分類としての明快さに欠けるように思われる。

Rapaport もいくぶん変わった分類をなしている。黒灰白特徴を色彩として用いた反応を Klopfer の“C'”を採用して分離し，狭義の陰影については“Ch”と“(C)”のふたつに分類している。“(C)”は，特殊な陰影反応に対するもので，非常に強い陰影をもつ領域に陰影を陰影として用いてない反応，例えば，Ⅳカード中央部への「顔」やⅥカード中央部への「人の姿」といった反応と，色彩領域の陰影を主に材質としてもちいた反応とに適用される。その他の陰影反応は，すべて“Ch”の記号があてられている。そしてこれらの陰影反応の意義については，Rorschach と Binder の見解を大きくとりいれている。この Rapaport の“(C)”はあまりに特殊で限られた分類であり，逆に“Ch”はあまりに雑多な反応が含まれるなど，分類カテゴリーとしてはなお疑問が残るものである。

上記以外の体系での分類は，先にあげた4つのカテゴリーの観点からみていくことがで

きる。その意義については後にExnerの意義づけの項でふれることとし，ここでは分類のみをみていく。

Beckは，材質反応に“T”，通景反応に対して“V”の記号を用いた。無彩色反応は分離せず，その他の明暗反応とまとめて“Y”としている。Phillips, L. & Smith, J.G.は，“c”，“V”，“C'”という記号を用いて，ほぼBeckと同じ分類を行なっている。

Hertzは，無彩色を白系と黒系にわけ前者に“Ch'”後者に“Ch"”の記号をもちいた。材質にたいしてKlopferの“c”を採り入れ，通景反応には“(C)”の記号を用いている。その他の一般的な陰影反応に対しては“Ch”をあてている。

Klopferは最も綿密な，それだけにある意味では，最も煩雑な分類を行なっている。まず，黒白系を色彩として用いた反応は“C'”としてひとつの分類とされた。彼は，狭義の陰影反応に対し“c”，“K”，“k”の3つの記号を作った。材質反応にたいしては“c”をあてた。Fc，cF，cという下位分類は，形態の関与だけでなく，材質としての陰影の分化度も加味されている。“K”という記号は，ふたつのカテゴリーを示し，一般的な用い方とは異なる。“FK”は通景反応であり，“K·KF”は主に拡散反応にたいして用いられる。“k”は特殊な反応に対する記号であり，三次元のひろがりが二次元的な平面に投影された反応としているが，「レントゲン」と「地勢図」という反応だけへの慣用的な分類といえよう。

他方，本邦において片口法は，問題を指摘しながらもKlopferの分類記号を採用している。また名大法ではBeckの記号をとりいれ，材質反応に“T”，通景反応に“V”をあてて，“Y”は拡散反応とし，無彩色反応を“C'”として分類している。阪大法は，1958年時点においては，材質反応にたいし“T”，立体反応にたいし“K”，拡散等の明暗反応に“c”，無彩色反応に“C'”をあてていたが，その後Beckの記号をとりいれ，名大法とほぼ同じ分類とないている。

従来の分類についての検討

以上，陰影反応について歴史的にみてきたが，陰影にたいする見解は，図版の起源からはじまり混乱の様相をきわめている。辻（1978）は，この現状をa）陰影は複雑で微妙なニュアンスをもっているため，因子を統制しにくい，すなわち，分類概念が統一しがたいこと，ならびにb）狭義の色彩と比べて陰影は目立ちにくく，反応として出現する機会が少ない，すなわち，検討するための材料が他と比べて乏しい，という二点が大きく関連していると指摘している。しかし，後者は必ずしも本質的な指摘ではないように思われる。陰影反応と同様に出現の少ないロ・テストの指標は他にもあるが，陰影に関してみられる程の見解の相違はないし，なによりも，陰影に関する研究数は他の指標と比しても決して少なくないのである。Exner（1966）の主要な指標別の文献表には，無彩色47編，材質

42編，陰影69編，合わせた総実数151編の陰影に関連した文献がとりあげられており，これは運動の181編や色彩の174編に比べてさほど変わらないものである。

偶然が生み出した陰影は，心理診断により豊かな情報を与えてくれるようであり，諸家の提唱している陰影についての解釈仮説は，それぞれに人格のある側面への鋭い洞察を含み，臨床的に特定の症例を理解していくうえでも示唆に富むものである。しかしこれらの仮説の根底にある基本的な分類概念に統一のみられない現状では，興味深い仮説や各々の仮説に基づく多くの知見を比較したり集積的に統合することは，必ずしも容易ではない。事実，バラバラの土台から得られた所見が，同一のものとして混同されて扱われることすらみられる。例えば，Piotrowski の“c'”に対する解釈が“C'”の解釈として引用されたり，比較されたりもしている。確かに，“c'”と“C'”には共通する部分も多いが，両者の分類概念が基本的に異なる点からこのようなとらえかたには疑問が残るし，また混乱に拍車をかけるように思われる。このような現状において必要とされることは，個々の分類や仮説に基づく発展性の少ない研究をかさねることでも，これらの知見についての無理な統合をはかることでもなく，基本的な概念の不統一を再確認し，系統的な探究につながるように基盤を見直し整理することであろう。

Exner (1974) はそのような問題を踏まえ，陰影に関連した反応全体について基本的な整理を行なっている。彼は，従来の体系での陰影反応を検討した上で，Klopfer の分類基準，規則をとりあげて具体的に検討をすすめている。Klopfer による陰影の分類は，陰影についての展望をおこなった Campo, V. & de de Santos,D.R. (1971) によって，最も体系的，理論的，具体的なものとして強く支持されているものでもあり，また片口法を中心としてこれに準拠するものが多い本邦において，最もなじみ深いものでもある。Exner は，Klopfer の分類を従来の体系のうちで最も包括的なものとして一応評価したうえで，綿密にしすぎた点と慣用的な（idiomatic）規則が多いという点で，分類基準が不明瞭になってしまっていることを指摘している。その慣用的な規則により，本来の基準と合わない反応に対しあるスコアが与えられてしまい，異なった種類の陰影反応がしばしば同一のものとして扱われてしまう。そのような傾向は，特に“c”に顕著である。「透き通ったスカート，脚がみえる」というような透視は光沢ゆえに“c”にされやすいし，同様に，「丸い」というような表現も“c”とされる。透視は，まず距離感が強調されるものであろうし，「丸い」や「でこぼこ」という表現は材質の場合も立体感を示す可能性もある。さらに形態の輪郭（contour）としての陰影の使用も“c”となる場合が多い。“K”に関する記号は，ふたつのカテゴリーにまたがり誤解を招きやすい。そのうちの“KF·K”は，拡散反応が主になっているが，明らかに立体感をもつ反応も含まれている。また，通景反応としての“FK”は一応陰影の使用を前提としているが，陰影の使用がなくてもこれに含まれやすく，鏡写（reflection）の反応も“FK”と慣用的にスコアされる傾向

にある。なお，Beck や Hertz の通景反応の分類においても同様な傾向がみられる。“k”については，その特別な分類の意味は疑わしく，経験的な資料も乏しく批判も多い。その“k”と慣用的にスコアされる「レントゲン」は無彩色あるいは拡散的な知覚によるものと，そしてもうひとつの「地勢図」は立体感の知覚よるものと考えられ，“k”はふたつの異なる陰影反応を含むようである。さらに，陰影の分化度もからめて設けられた下位スコアも，分類基準をより煩雑なものにしている。

このような基準規則における問題点を考慮し，Exner は次のように分類を設定していった。彼は，まず，黒灰白色を色彩として用いた反応を，a）多数の実践家が使用している，b）従来の研究で理論的な支持を得ている，c）狭義の陰影とは異なる診断的評価的な価値が認められている，という理由により狭義の陰影から分離し，これを無彩色反応として，記号に Klopfer の“C'”を採り入れている。

次いで，陰影に関しては，a）陰影としての分類基準が厳密であること，b）慣用的な分類をさけること，c）種々の陰影反応を大体区別できること，を前提に Beck と Hertz の分類が他より適切と評価し，それを参考にして3つのカテゴリーに分類した。記号は Beck のものを採用しているが，その理由として彼は，a）実践家への調査によると，Hertz の記号より Beck の記号がよく知られていることと，b）Hertz の記号“(C)”や“Ch”は，“C”や“C'”などの他の記号と類似してまぎらわしいこと，をあげている。狭義の陰影反応は，材質反応として“T”，通景反応として“V”，拡散その他の陰影反応として“Y”と分類された。勿論，この“Y”には無彩色反応を含まないし，各々の分類基準も Beck と同じものではない。

以上の分類に加えて Exner は，彼自身の臨床的研究の成果に基づき，さらにふたつの新たな独立した分類カテゴリーを設けた。この両カテゴリーは，従来慣用的に陰影反応に含まれる傾向にあったもので，陰影の基準を厳しくしたことにより除外された反応を含むものである。そのひとつは形態に基づいて通景が意味づけられた反応であり，これには“FD”という記号が与えられた。もうひとつのカテゴリーはプロットの左右対称性に関連した反応であり，対称性ゆえに鏡写（reflection）を意味づけた反応と，それにつながると考えられる一対の同一対象が知覚された反応からなっており，各々に“r”と“(2)”という記号があてられた。このふたつの分類について，Exner はまだ検討の必要は残されていると慎重に断わっている。なお，陰影が形態の輪郭を表わすものとして用いられる場合があるが，Exner はこれをFとスコアすべきものとしている。そして，この種の反応は解釈的にはプロットの内的な形態特徴を選択的に反応したという意味で重要であるが，陰影反応と混同してはならないと注意を加えている。

Exner は，陰影に関連する決定因として，6つのカテゴリー，16の下位スコアを設けた。下位スコアについては，色彩反応に準じ，形態の関与の程度あるいは反応形成におけ

る陰影と形態の強調の程度により決定されている。次に，その分類基準と意義づけの概要を各カテゴリー別にみていく。なお，Exner が標準化群（reference sample）とした健常群と３つの病理群についての各カテゴリー毎の平均値を表２に示しておく。

表2. Exner (1974) による健常群ならびに３病理群の平均値

分類カテゴリー	健　常　群 (n=200)	外来 非精神病群 (n=100)	入院 非分裂病群 (n=70)	入院 分 裂 病 群 (n=125)
C';FC'+C'F+C'	0.60	1.30	1.60	1.20
T;FT+TF+T	1.40	2.60	2.80	2.30
V;FV+VF+V	0.40	0.90	1.30	0.70
Y;FY+YF+Y	1.30	2.50	2.60	1.90
FD	0.80	2.30	2.50	0.50
r; Fr+rF	0.20	0.70	0.90	1.20
(2)	7.30	9.60	7.10	10.80
R	21.60	23.10	20.70	23.80

Exner による分類基準とその意義づけ

無彩色反応（Achromatic Color Response）　C'

プロットの黒－灰－白色の領域を実際に色彩として用いた反応に適用する。形態の関与により３つの下位スコアに分けられる。「黒」や「灰色」という言葉が，ある領域を示す場合や陰影を表現するために用いられる場合を除けば，比較的容易にスコアできる。

FC'　形態が一次的な決定因となり，黒灰白色特徴が二次的に推敲（elaboration）や明細化に用いられた反応。特定の形態をもった反応内容であるか，あるいは形態の強調がある。

C'F　無彩色特徴が反応形成において主な役割をはたし，形態が二次的な推敲や明細化の目的で用いられた反応。ここにスコアされる反応は，形態が漠然としたものか未分化なものが大部分である。「煙」という反応はC'Fの場合もあるが，被験者が「黒」や「灰」という言葉を使って陰影をあらわす場合があるので，質疑段階では慎重な確認を要する。

C'　プロットの黒灰白特徴にのみ基づく反応であり，非常に稀にしかみられない。形態的な特徴を用いようとする試みが，まったくみられない。

Klopfer は，無彩色反応を低調な感情体験を示し感情の直接的な表現への躊躇をあらわすものととらえている。Rapaport は，用心深く慎重な適応様式で知的な要因が感情の表現を妨げていることを示すものとしている。一般に，無彩色反応は抑うつ感情のひとつの

指標とされているが，それに関する研究はあまりみられない。しかし，自殺に繋がるような抑うつの研究を通覧しても無彩色反応との関係はみとめられておらず，自殺に関しては，むしろ無彩色より色彩－陰影複合反応に焦点がむけられており，“C'”と抑うつとの直接的な関係はないと考えられる。しかし，表2に示されたように，70％が抑うつ患者でしめる非分裂病群では1.6と多く，抑うつと間接的にかかわるような感情の抑止傾向（affective constraint あるいは constained affective）と“C'”との関係が推測された。

この“C'”の意義に関して，Exner はふたつの研究を通して検討している。ひとつは抑うつ症状と診断された患者で，ロ・テスト後55日以内に自殺企図がみられた16名とみられなかった48名との比較をみた研究である。そこでは，自殺企図者において“C'”が平均0.7で16名中5名にしかみられなかったのに対して，非企図者では，平均1.8で48名中34名に“C'”がみられた。他の指標では，自殺企図者は非企図者に比べて SumC，CF，m，FM などが有意に多く，感情の直接的な行動化の傾向がみられるようである。一方，非企図者の“C'”は，抑うつに伴う激しい苦悶をかかえこんでいる（contain）状態を示すものと考えられる。

次いで彼は，心身症者，強迫神経症者，分裂質者（schizoid）からなる感情の抑止群42名と，精神病質者と受動－攻撃性格者（passive-aggressive）からなる感情の非抑止群42名との比較を，統制群42名も加えて行なっている。ここでは，抑止群に他の2群より有意に多い“C'”がみられたほか，さらに受動的な運動反応が多いという結果も得られた。これらの結果は，“C'”が感情の抑止に深く関連していることを支持するものと考えられる。

解釈において，形態の関与度は当然重要なものとなる。形態が優位であれば，その抑止の機能は認知的に統制されていると考えられるが，そうでない場合は，認知的機能への衝撃（impact）は激しく，時には破壊的な可能性を秘めていることも考えられる。Exner は，抑止という体験は不安を伴うものであるが，不安と混同してはならないと注意している。抑止とは感情の内面的な表現であり，それは M で現わされるような心理過程より直接的な表現だが，F で示されるような遅延（delay）をも含むものである。“C'”において感情は解放されてはいるが，外的世界に直接表現されず内面的に抑えられ，“C”に反映されるような活動による解放も行動での表現もみられない。そして，“C'”と結びついた体験は，認知的な安定性を動揺させるような苦痛と緊張を伴ったものであると考えられる。

材質反応（Texture Responses） T

ブロットの陰影特徴が触覚的な刺激を表わすものとして意味づけられ，知覚された対象の表面組織や材質として知覚された反応に適用する。陰影反応では，最も多くみられるも

のである。「柔らかい」,「あらい」,「ぶつぶつした」,「毛皮のような」といった表現で陰影の使用が示される。しかし，そのような表現が形態によって，時には色彩によりなされる場合もあり，質疑段階での技術が要求される。形態の関与度により３種のスコアがなされる。

ＦＴ　形態が一次的な決定因であり，陰影が材質を表わすものとして推敲や明細化の目的で，二次的に用いられた反応。

ＴＦ　陰影特徴が材質として意味づけられ，形態が二次的な推敲や明細化の目的のために用いられた反応。普通，曖昧な，不定の形態をもつ内容であるが，特定の形態を持つものであっても，陰影が強調され，反応形成に重要な役割をなしている場合，ＴＦとスコアされる。

Ｔ　まったく形態をふくまず，陰影要素が材質を示すものとして意味づけられた反応。稀な反応であり，形態特徴を用いようとする努力がみられない。曖昧であれ無形態なものであれ，なんらかの形態関与があればＴではなくＴＦとスコアされる。

“Ｔ”は陰影反応のなかで最も多くみられるものであるが，表２に示されるように病理群に多く，健常群の平均1.4に対し概して２以上となっている。材質反応について，Klopfer は愛情欲求（need for affection and dependency）のあらわれととり，Beck は苦痛に満ちた情緒的体験（painful affective experience）の指標とし，より幼児的な性愛欲求（erotic needs）をあらわすものとしてとらえている。両者とも，形態の関与度をその基本的な欲求への統制度や影響を知るためのものとして重視している。彼らの仮説は各々今までの研究によりある程度支持されている。

Exner はこれらの仮説や業績をまとめ，“Ｔ”を情緒的な対人的交流への欲求（needs for affective interpersonal contact）を反映するものととらえ，そしてそれはより幼児的なもの（infantile）であるとしている。また，Hertz の指摘するような，用心深く情緒的関係を求める態度と関連するものとも考えている。このような欲求が個人におよぼす影響（impact）は，個人の体験する対人的な安定感によって差があるものとしている。

過剰の“Ｔ”や形態関与の低さは，原初的な欲求が激しく，認知過程での常識的な現実見当識が障害されていることを示すものとされる。逆に“Ｔ”の欠如は人生初期での情緒的な関係の乏しさをうかがわせるものであり，意味ある深い対人関係を求められないことをあらわすものであろう。実際，彼の標準化群において“Ｔ”の欠如は，健常者群では200名中わずか９名しかいないが，“Ｔ”の平均値では明らかに高い病理群において295名中58名もみられている。他の指標との関係では，Ｍとの結びつきは内的な感受性や共感性に関連し，Ｃとの組み合わせは，対人接触を求めるうえで，直接的でやや成熟さを欠いた行動につながるものとされる。

通景反応（Shading Dimensionality Responses or Vista Responses）　V

ブロットの明暗特徴が，奥行きや通景として意味づけられた反応に適用する。これは，陰影特徴が平面上での遠近効果へと変容された反応として特徴づけられる。陰影反応のうちでは最も少なく，あまりみられない反応である。「でこぼこ」といったような言葉により，材質反応との識別が時に問題となることがある。形態関与の程度により，３つの下位スコアに分けられる。

ＦＶ　形態が一次的特徴となり，陰影要素が奥行きや通景を示すものとして用いられた反応。内容としては特定形態を必要とするものが多いが，「風景」などは FV となりやすく，形態の強調が重視される。内容としては様々なものがスコアされる可能性がある。

ＶＦ　陰影が奥行きや通景としてまず強調され，形態が明細化や推敲の目的で二次的に用いられた反応。特定の形態を持たないものは，通常この反応とされる。「特定地域の地勢図」など，形態の強調があれば FV となる。特定の形態を必要とするものでも，遺影の効果が強調されれば VF とスコアされる。

Ｖ　まったく形態を含まず，陰影特徴にのみ基づき奥行きや通景を報告する反応。非常に稀な反応であり，「深さ！」，「私の方に突き出ている」というようにこの反応がなされる時は，ある意味で劇的でさえある。

Rorschach は，このような陰影に結びついた通景反応について抑うつ状態との関連を示唆している。Klopfer は，彼自身の分類による通景反応の“FK”を，自己から距離をとり，冷静で客観的に自分の問題を対処しようとするような内省的（introspective）な心理過程を反映する指標ととらえた。同時に彼は，この内省は洞察（insight）と異なるものであり，両者を混同しないように注意している。Beck も通景反応について似たような内省過程を想定しているが，それはより苦痛な自己評価を伴い，抑うつ感情に含まれるような不快さ（morose feeling tone）や劣等感とに関連するものとしている。

Exner は，“Ｖ”の意義を検討するため３つの研究を行なっている。第一は，“C'”の項でもふれた，テスト後55日以内に自殺を図った16名を含む64名の抑うつ状態の患者に関して検討した研究である。そこでは，自殺企図者の“Ｖ”は平均2.36，16名中15名にみられたのに対し，非企図者では平均1.53で48名中36名であって，両者の“Ｖ”には有意差がみとめられた。なお，非企図者の平均値自体も，比較群となった外来患者の0.73，健常者の0.44より有意に高いものであった。

第２の研究として彼は，40名の治療待機患者を10名ずつの集団に分け，治療計画と目標を設定するという名目で週２時間の集団会合（group meeting）をもたせた。ロ・テストはこれに先立つ10日間に施行し，その会合での発言内容を２つの観点から評定するために３名の観察者が訓練をうけた。その評定のひとつの次元は，自己と他者のうちどちらに志

向しているのかというものであり，いまひとつは，過去，現在，未来のいずれに関心が向けられているかという次元である。これらの資料は後に述べる自己観察の指標としての“FD”の高低によって２群に分けられ検討された。その結果，過去および現在という文脈で自己に関心が向かっている高“FD”群の“V”は，平均1.41，20名中18名の出現であり，低“FD”群の平均0.52，20名中７名の出現との間に明らかな差が認められた。

いまひとつは，感情障害と診断された74名の患者に関する治療前後の記録を比較した研究である。治療前の記録では，“V”は平均1.61，74名中62名にみられていたのが，治療後には平均0.59，74名中29名と有意な減少をみた。興味深いことに，“FD”は治療前2.3で治療後2.1となりほとんど変化しなかった。この結果は，苦痛に満ちた性質の内省特徴は治療により取り除かれたが，内省的な傾向は依然持続していることを示すものと理解された。

これらのことからExnerは，“V”は内省的な過程を反映しているが，それはKlopferの仮定するような自己から距離をとり感情に巻き込まれない自己観察ではなく，情緒的な苦痛にみちた過程（painful process）である，とまとめている。“T”や“Y”と異なり，“V”の欠如は，特にいくつかの“FD”がみられる場合は，好ましい。“V”がひとつでもみられる時には，注意を払う必要がある。１つのFVがみられる場合は，多少苦痛であれ自己観察として生産的に機能できると考えられるだろう。しかし，多量のFM＋mやC＋CF＞FC，形態質の全体的低下などと共に“V”がみられた時は，自殺に直接つながるものでないとしても，自己破壊的な傾向が明らかに予測される。

拡散反応（General Diffuse Shading Responses）　Y

通景や材質といった特殊な知覚ではなく，より一般的な方法で，陰影を用いた反応。このような陰影の使用が，反応内容をより特別なものに仕上げるために付加的に用いられる場合も少なくない。陰影反応では材質についでよくみられる。やはり形態の関与度により３つの下位スコアにわけられる。

FY　形態特徴が反応形成に一次的な役割をなし，陰影が明細化や推敲の目的で用いられた反応。FYの場合，普通その内容はFともスコアされるものである。「雲」は陰影と結びついた場合，概してYFが多いが，「雲のようなかんじ」はYとなることもあり，また，形態が強く強調されればFYともなる。

YF　明暗特徴が，反応形成に一次的にはたらき，形態が二次的に推敲や明細化の目的で用いられた反応。概して曖昧な，あるいは不定形な形態をもつものが内容となる。たとえ漠然としたものでも形態の叙述があれば，YではなくYFとなる。

Y　明暗特質にのみ基づき，まったく形態を含まない反応。内容としては「霞」，「もや」，「霧」，「闇」といった典型的に形態をもたないものである。純粋のYは非

常に稀であるが，「腕を上げた女性，周りを煙がたちこめている」のように，他の形態をもつ知覚に組み合わせられて（結合スコアとして）みられることが多い。当然ながら，なんらかの形態が加えられればYとはならない。

“Y”は“T”と同程度の頻度でみられ，やはり病理群に多く外来患者群と非精神病群では健常者の約2倍の“Y”がみられている（表2参照）。一般に，この種の陰影反応はなんらかの不安をあらわす指標と仮定されている。Klopfer は，“K·KF”について，未解決の欲求挫折（frustration）が背景にあるような漠然とした浮動性の (free floating) 不安を仮定している。Beck は，この種の反応を防衛としての非活動性（inactivity）や心理的な麻痺（paralysis）としてとらえている。それは，欲求の充足を遅延させることによりエネルギーを蓄える傾向の場合もあれば，まったく圧倒された無力さを示すこともあるが，いずれにせよ，その個人にとっては苦々しい不幸な状態として体験されるものと仮定されている。

両者の仮説をもとにした陰影－不安仮説と陰影－受動仮説に関して多くの研究がみられる。それらを通覧すると，前者に関しては否定的な見解も少なくないのに対し，受動仮説はより一貫して支持されているようである。加えて，“C'”の項でふれた Exner 自身による抑止群と非抑止群との比較においても，抑止群で“Y”が有意に多いという結果が得られている。

これらのことから“Y”は，不安の直接的な指標としてではなく，不安を生じさせるような心理的な無力感（helplessness）や引きこもり（withdrawal）の指標としてとらえられた。そして他の陰影反応と同じように，それはやはり苦痛に満ちた体験を反映するものとされる。形態関与の程度や質は，このような不快な情動体験に対する認知的な対処の指標となる。“Y”がほとんどの記録にみられるのは，プロットのもつ曖昧さによってある程度の不安定感を喚起されやすいためであろう。逆に“Y”の欠如は，曖昧さへの無関心や感受性の欠如が想定され問題となる。“Y”の個人への影響は，純粋Fや M，また Z 活動（全体反応の組織化についての指標）のような対処能力の指標との照合で理解されるべきであろう。

形態通景反応（Form Dimensionality Responses）　FD

形態に基づき，通景や奥行きを意味付けられた反応に適用する。新しいカテゴリーであるが，この種の反応は Klopfer や Beck の記述にもみられ，そこでは陰影による通景反応に含まれてしまう傾向にあった。この形態による通景の知覚といっても，次に記すように2つの場合がある。

FD　プロットの領域の大きさ（size）や他の領域との関係というような形態にのみ基づき，通景や立体効果が意味づけられた反応。例えば「足が大きく頭が小さい，

向こうの方に寝ている大男」のような形態の遠近法的な知覚による通景の反応と，「うさぎの足がある，草むらに隠れている」というような，反応内容の形態特徴の欠如をブロット領域間の関係から「隠れている」「後ろにいる」等と意味づける通景の反応とがある。

“FD”をひとつの分類として独立させた契機は，ロ・テスト後90日以内に自殺を図った60名の記録の検討によるものとされる。その記録には平均3.1の“FD”がみられており，一方健常者では平均0.8であった。はじめ“FD”は自殺者に特異の抑うつ的特質と関連するものと思われたが，表2のように外来患者でも2.3と多くみられ，逆に分裂病者では0.5と少ない値であった。これらの資料より，内省的活動（introspective activity）との関連が推測された。すなわち，外来患者はその治療的手続きゆえに内省的になるように働きかけられるし，また，抑うつ患者はその病理性自体から内省的な傾向にかりたてられているのであろう。

“FD”についてのこの推測を検討するため，Exner は3つの研究を行なっている。まず，健常者群ならびに病理群のすべてを M の総計と SumC の関係で，M ＞ SumC 群，M ＝ SumC 群，SumC ＞ M 群とに分けて検討している。M は内的な反応性に関連し，C は感情的な反応性を反映するものと認められていることから，内省的な個人は内面的なものに反応しやすく，情緒的で感情的なものに反応しにくいであろうという仮説がたてられた。M 優位群187名の“FD”は平均2.42，C 優位群206名では平均0.95となり，両群に有意差がみとめられ，この仮説は支持された。

次に，その内省性自体について分析を行なっている。これは“V”の項で触れた研究であり，彼は40名の治療待機患者を10名ずつの集団に分け，集団会合をおこなわせている。そこでの発言を，a）自己についてのものか，あるいは他者についてのものか，b）過去，現在，あるいは，未来に関したことか，というふたつの観点から評定した。ここでの実験仮説は内省的な者は自己により注意が向かい，また現在により関心をもっているだろう，というものである。“FD”の中央値で二分した結果，平均2.83の高“FD”群は，平均1.34の低“FD”群に比べ，自己に関した発言が有意に多くみられた。過去，現在，未来という点では差がなかったが，過去と現在を合わせると有意差がみられた。すなわち，“FD”の多い者は，過去と現在の文脈において自己に焦点が向かう傾向にあった。確かに，“FD”は自己に関心が向かう傾向を示すようであるが，さらにこれが単なる自己中心性（egocentricity）のあらわれか，あるいは，自己観察（self examination）なのかを確かめるために，自己志向文章完成法（Self Focus Sentence Completion）による検討が加えられた。その結果，高“FD”群はわずかながら外的世界に関心が向いており，この実験でみられた自己に関する発言は単なる自己中心性のあらわれではないことが明らかとされた。

次いで，15名の非精神病患者の治療の経過による変化をみている。治療のはじめに施行したロ・テストにおいて，“FD”は0から4の範囲にあり平均2.06であった。治療10回後の記録では，“FD”は1から6の範囲であり平均3.11となり増加をみせていた。治療終結は，40回から50回で約7か月にわたった者3名，65回から80回で約11か月にわたった者8名，100回以上13か月以上にわたる者4名となっている。その終結後，“FD”は0から3の範囲で平均1.24となっていた。これは2回目の結果より有意に低く，初回とは差のないものであった。この結果は，自己観察を訓練するといえるような治療初期には“FD”は増加するであろうという仮説を支持するものであった。

これらのことから“FD”は，自己視察（self inspection）あるいは自己観察，少なくとも自己知覚（self awareness）を含んだ心理的活動に関連するものであり，それは感情の遅延作用をもつものととらえられた。言い換えれば，自己観察とは，自己の長所や短所を考慮しながら，感情の発散を遅延させるというあり方で，その欲求を処理するような心理的活動であろう。その作用の効率と影響は，“FD”のみで判断するものではなく，その他の対処能力と情緒的な状態との関連をもって理解されるものであろう。

鏡映反応 (Reflection Respnses) と一対反応 (Pair Response)　r　(2)

“r”はブロットの左右対称という形態特徴に基づく鏡写（reflection）反応に適用する。Klopferでは“FK”，Beckにおいては“V”にスコアされる傾向にあった反応であり，新しいカテゴリーとして“FD”と共に加えられた。反応内容における形態の特定性により，2つの下位スコアに分けられる。なお，対称性に基づかずに陰影による鏡写の反応は，当然“V”とスコアされるが，そのような反応は稀である。“r”に関連したものとして，ブロットの対称性に基づき，ふたつの同一対象つまり一対の対象がみられた反応を“(2)”としている。なおExnerは，決定因について付加スコアではなく結合スコアを採用しているが，“(2)”は他の決定因とは別にして，形態質評価の後ろに記録するようにしている。彼は，この出現数が多いこともあり“(2)”を補助的な決定因として扱っているようである。

Fr　特定の形態をもつものが内容となり，ブロットの対称性ゆえに鏡写された（reflected）ものとして意味づけられた反応。「鏡をみている」「水面にうつる姿をみている」などのように，運動と結びつきやすい。

rF　形態が不特定で曖昧なものが内容として知覚され，対称性から鏡写された（reflected）ものとして意味づけられた反応。不特定な形態でも十分な明確化があれば，「風景」などはFrとなる。

(2)　対称性に基づき，同一のものとしてのふたつの対象がみられた反応。ふたつの対象は，鏡写（reflection）ではなく独立したものでなければならない。表現とし

ては「ふたつの」,「ひとくみの」,「カップルの」,「こっちにひとつ，こっちにもひとつ」といったものがある。しかし，これらは対称性に基づかねばならない。

“r”を独立した分類としたのは，“FD”と同様いくぶん偶然的な研究成果によるものである。それは，同性愛群，精神病質と社会病質と診断された性格障害群，抑うつ群，健常者群各20名を扱った行動化（acting out）の研究であった。分析の結果すべての群でBeck法でのFVが多くみられた。そのFVを詳細に検討すると，前の2群にブロットの対称性にもとずく鏡写（reflection）の反応が多いようであり，これらを“r”として別個に分類すると有意な差がみられた。“r”の平均値と出現者数は，同性愛群1.85で20名中17名，性格障害群1.45で15名，抑うつ群0.2で3名，健常者群0.7で7名となっていた。また，一対反応をこの“r”に関連したものとして算出すると，同性愛群で有意に多く，抑うつ群で有意に少なかった。この結果から“r”ならびに“(2)”は，自己愛（narcissism）あるいは自己中心性（egocentricity）に関連した指標としてとらえられた。なおExnerは，自己愛という概念が複雑であるという理由でこの用語の使用を避けている。

次いで彼は，自己中心性について検討するための文章完成法を作成して健常者750名に施行し，その得点が高い者と低い者40名ずつをとりだし，ロ・テストを施行した。その結果，高自己中心性群では40名中37名に“r”がみられ，低自己中心性群の約2倍であった。“(2)”についても同様で，高自己中心性群は約2.5倍の“(2)”をみせた。先の文章完成法をより洗練させて新たに30名ずつの高低両群を比較した結果でも高自己中心性群は低自己中心性群の約2倍の“r”と“(2)”を示していた。

標準化群の“r”は，健常者群0.2，分裂病群1.2，外来患者群0.7，非分裂病群0.9となっており（表2参照），“(2)”は健常群と非分裂病群でRの約3分の1程度みられ，外来患者と分裂病群で比較的高い値を示している。非分裂病群を，抑うつ者と性格障害が主となる非抑うつ者に分けると，前者において“r”が0.3で“(2)”は5.8，一方後者では“r”が1.5で“(2)”が10.4となり，両者に明確な差がみられている。

この2つの指標をひとつの分類として採用するにあたり，彼は2つの研究を行なっている。まず，分裂病群75名，抑うつ反応群74名，性格障害群31名の治療前後の記録を改善度別に比較している。治療による変化は，2つの臨床尺度（Inpatiant Multidemensional Scale およびKatz Adjustment Scale）によって評価された。非改善群には，実質的な変化はみられなかったが，改善群の“r”と“(2)”には有意な変化がみられている。つまり，分裂病群と性格障害群では“r”が減少し，抑うつ群では増加がみられていた。“(2)”も同様で，分裂病群は減少，抑うつ群では増加を示し，性格障害群は有意ではないが減少の傾向にあった。ここでの“r”や“(2)”は，病理状態に伴う自己集中（self centeredness）や自己中心性の過不足をあらわし，その変化は治療による改善で健常者に近い自己中心性のレベルに変化したことを示しているのであろう。

第2は，自己中心性自体の現象に焦点づけた研究である。ある職業への21名の志願者が被験者となった。彼らは，ロ・テストを含むいくつかの検査をうけた後，面接をうけるため10×12フィートの部屋で10分間待たされた。その独りで待たされている間に，部屋にある鏡で自分自身をみた時間がビデオ記録から集計された。鏡をみた時間は6秒から104秒の範囲にあり，中央値は49秒であった。鏡をみた時間の多い上位10名は平均68.5秒で，“r”は8名にみられ，“(2)”の総数は103であった。鏡をみた時間平均27.1秒の下位10名では，“r”はまったくみられず，“(2)”の総数は68となっていた。両スコアとも有意な差が認められている。

これらの結果により，“r”と“(2)”は自己中心性と関連していることが確認された。自己関心（self concern）の過剰も適度な自己関心の欠如も病理的な状態につながるものではあるが，自己中心性は自然な特質であり，過度（overdone）や未発達（underdeveloped）でないかぎり長所として機能している。このことから“3r＋(2)／R”という比率が経験的に自己関心の指標として作り出された。健常者群では，70％の者が.25から.40に含まれる。健常者の場合，“r”はほとんどみられず，この数値は，大部分“(2)”によるものである。分裂病群，外来患者群，性格障害群においては，平均.54で，.40から.60に70％の者がはいる。抑うつでは平均.27で.10から.30に約3分の1の者がはいる。“r”に荷重が高いのは非常に稀な反応であるためであり，“r”がみられたら，先の比率にかかわらず注意を要す。多分，自己への強いとらわれ（intense self focus）を意味し，特に対人的な状況での現実歪曲をもたらすものと考えられる。自己中心性が思考や行動の面に与える影響については，DQ分布（領域についての評価から得られる発達指標）によって明らかにされる認知的成熟性，F＋％ならびにX＋％（片口法のR＋％と同じ）によってしめされる知覚的正確性，Pによる常識的知覚の程度などと照合して理解していくことが重要である

若干の考察とむすび

Exnerの陰影に関連した反応について，その分類基準と意義の概要をみてきた。彼の分類は，統一をみず混乱した状態にあった陰影についての見解を適切に整理し統合しており，日常のロールシャッハ臨床で体験する陰影反応に関しての戸惑いや疑問についてある程度応えてくれるもののように思われる。彼の“Comprehensive System”自体は，その名も示すように，ロ・テストについての今までの広大な業績を包括的にうまく統合しようとしたものであり，けっして独自性を主張するものではない。この点では，ロ・テストの事典とも評される（空井，1970）片口法と共通するように思われる。しかし少なくとも，ここで扱った陰影に関連する反応については，これまで統合化に利用し得る業績が乏しいこともあって，彼自身による臨床的研究の成果に負うところが大きく，その分類と意義づけ

は今までにない独自なものとなっている。具体的にみると，新たな分類となった“FD”と“r”が目を引くだろう。これらの反応は，従来諸家がなんらかの意味を認めていたが故に単なるFとみなしえず，陰影に含められていたように思われる。それらの反応をその意義も検討したうえで，新しい分類として独立させたことは，新たな心理診断的価値をもつ指標を生み出しただけでなく，さらに陰影についてのより厳密な検討をすすめる際にも大きく寄与するものとして高く評価されるところであろう。

Exnerの分類は，陰影に関連した反応の今後の系統的な展開をもたらすものと期待されるが，なお細部にわたっては検討されるべき余地を残している。Exner自身が指摘するごとく，“FD”と“r”はその追試を含めてまだ研究がかさねられねばならないだろう。また，“(2)”は決定因として不適切なように思われる。たしかに，“r”とからめた“(2)”の着想は興味深いし，自己中心性の指標としての価値も評価されるように思われる。しかし，“r”を補完するだけのために“(2)”をひとつの決定因とすることは，スコアの記述の繁雑化につながり，さらにこの分類の必要性とも合わせて，疑問の残るところである。逆に，従来より諸家からその存在の指摘が多かった，輪郭としての陰影の使用については，簡単に触れているだけで何らその意義についての検討がなされていない。確かにこの種の反応を材質反応とするのは不適切であろうが，単にFに含めることの適否については，臨床的にも少なからずみられる反応だけに，十分な検討が必要に思われる。

陰影に関する反応の分類について，Exnerと片口法（修正Klopfer法）との対応を図1に示し，また，表3にはそれらについてのExner（1974）とカロ研究グループ（1972）および高橋・北村（1981）との健常者からの標準値を，できるだけ対応させ示しておく。この表はあくまで参考としてのものだが，分類基準に基づく差異と共に，比較文化的な差異も十分推測されるであろう。いずれにせよ，本論で扱った従来とはかなり異なる分類の本邦での適用が必要であろう。またExnerのその包括的な技法体系は，先に指摘した片口法との類似性もあり本邦になじみやすいように思われる。既にその断片的な紹介やその分類を用いた研究も散見されるが，“Comprehensive System”の全体的な検討や本格的な標準化に関する作業を通しての本邦への導入が望まれるところであろう。

Exnerの各分類のもつ意義や診断的価値については，本来臨床的資料をもって検討すべきものであるが，さしあたりここでは彼の陰影に関する分類や意義についての印象的所見をまとめておく。

1）各スコアについてみると，以下のとおりである。

C’；不快で不安定な感情があり，それが個人に比較的明確になっているが，それが内面的におしこめられているような状態を示すものであろう。いくぶん無理な感情の統制が想定される。

T；基本的な，あるいは，原初的な対人欲求をあらわすものであろう。対人関係での情

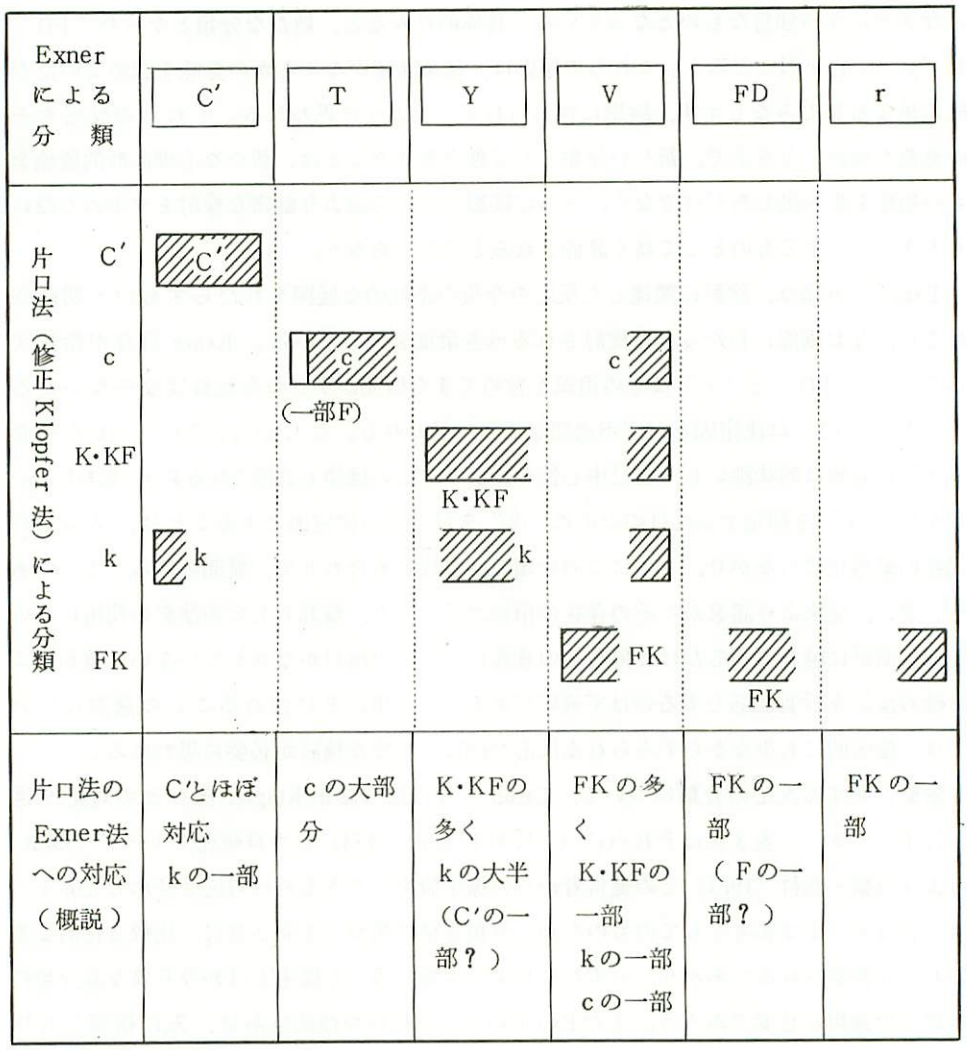

図1　陰影に関連する分類における Exner 法と片口法の対応

表3. Exner (1974)、カロ研究グループ(1972)、高橋・北村(1981)による健常者の平均値

分　類	C′	T	Y	V	FD	r	R
Exner (n=200)	0.60	1.40	1.30	0.40	0.80	0.20	21.60
対　応							

分　類	C′	c	k+K・KF	FK	R
カロ研(n=118)	1.95	2.31	0.58	0.73	23.42
高橋・北村(n=200)	0.7	1.8	0.3	0.7	31.7

緒的交流における距離を縮小するような機能が想定される。

V　;否定的な感情を伴った自己内省，あるいは，自虐的内向が仮定されている。被虐的傾向や懲罰的な超自我といったものとの関連がうかがわれる。自分自身だけでなく，対人的交流においても，距離を増大するような機能が想定されるように思われる。

Y　;不安定で不快な感情がありながらそれを漠然としかとらえられず，そのため活動が抑えられているような状態をしめす。確かに，受動性が基盤に想定され，不安や無力感との関連がうかがわれる。Exner の資料が示すように出現頻度が高いならば，不安への耐性や順応性といったものとの関連が考えられよう。なお表３で示されているように，拡散反応に関して明白な差がみられているが，これが基本的分類概念の相違に基づくものか，あるいは米国と日本との文化的差異によるものか気になるところである。

ＦＤ;知的な側面での自己内省，あるいは自己精査の指標とされる。Klopfer の“FK”の解釈はこの種の反応に基づいていたのではないかとも思われる。知的な統制力が前提として想定され，また知的な側面での対人的な距離との関連がうかがわれる。

r　;低次なレベルでの自己へのとらわれを示すものであろう。Exner は自己中心性という用語をもちいているが，これはいくぶん不明確な印象をうける。これについては，自己愛との関連を，自己愛自体の定義も考慮しながら考えてみたいところである。

２）無彩色をふくめた陰影にたいする意義付けの根底には，共通して抑うつにつながるような苦痛を伴う情緒性が仮定してある。これは，Beck の陰影にたいする見解を大きく受け入れたものと思われる。また，“FD”と“r”も含めてこれらの反応は，対自的・対他的な関係のあり方を大きく反映しているようである。境界例や思春期・青年期障害の研究を通して，対象関係のひとつの指標としてとらえていくことも興味深く思われる。

３）無彩色も含めた陰影に関し，“C'”と“Y”は類似性と対応性があるようにみられる。同様のことが“T”と“V”についてもいえる。“C'”と“Y”は，どちらも，外的活動の低下を示し，不快な感情体験がその前面に仮定されている。しかし，“C'”ではかなり意識的な統制がはいっており，“Y”はかなり受動的であるというところで対応される。“T”と“V”は，他者と自己との対比はあるが，いずれも強い対象指向性があるようだ。また両者は距離という概念でも類似され，“T”はその減少，“V”はその増大という点で対応できるようにも考えられる。

４）黒灰を主とした陰影の基礎的な知覚のあり方という点からも，上記のような類似性と対応性がうかがわれる。すなわち“T”と“V”は，陰影のより微妙な変化をとらえたもので，ある意味で分化した知覚といえ類似性をもつ。逆に，“Y”と“C'”は陰影の全体的印象をとらえたものであり，より未分化な知覚といえよう。対応性についてみれば，“T”は図版自体の特性に一層注意を向けた知覚であるのに対し，“V”は図版にない立体効果を想像するもので，より内的なものが関与した知覚であろう。不用意な推測は

慎むべきであるが，“Y”は図版の明暗をそのまま受動的にとらえたものであり，“C'”はその明暗の変化を無視，あるいは均一化しているという点で，内的な過程の関与が考えられるだろう。Exner は，Baughman, E. (1959) と自ら（Exner，1961）の研究を引用し，ブロットの色彩を変えると通景反応の出現数に変化がみられ，材質反応にはそのような変化がなかったことを紹介している。すなわち，材質は色彩の濃淡の知覚によるもので，通景は黒灰の明暗の知覚に依拠していると考えられる。この“T”，“V”，“Y”ならびに“C'”という経験的な分類は各々異なる基本的な知覚過程が介在しているものとして，とらえなおすことが可能と思われる。

参　考　文　献

Campo,V.& de de Santos,D.R. 1971 A critical review of the shading responses in the Rorscach I: Scoring problems. Journal of Personality Assessment , 35, 3 −21.

エレンベルガー，H．　大槻憲二（訳）　1958　ヘルマン・ロールシャッハの生涯と業績（上）　ロールシャッハ研究Ⅰ　1 −20（Elenberger, H. 1954　The life and work of Hermann Rorschach (1884−1922).　Bulletin of the Menninger Clinic , 18, 172 − 219.）

エランベルジュ，H．F．　中井久夫（訳）　1981　ユステイーヌス・ケルナーからヘルマン・ロールシャッハへ——インクブロットの歴史——　ロールシャッハ研究XXⅢ　1 − 8　（Ellenberger , H.F.　1981　From Justinus Kerner to Hermann Rorschach —— The history of the inkblot .）

エクスナー，J．E．　梅津耕作（訳編）　1969　ロールシャッハの基本的採点法　ベック方式とクロッパー方式　日本文化科学社　（Exner, J.E. 1966　*A workbook in the Rorschach technique emphasizing the Beck and Klopfer systems.* Charles C. Thomas Publisher Illinois）

Exner, J.E. 1969 *The Rorschach systems.* Grune & Stratton

エクスナー，J．E．　本明寛・今井もと子・和田みよ子（訳）　1972　ロールシャッハ・テスト分析と解釈の基本　実務教育出版（Exner, J.E. 1969 *The Rorschach systems.* Grune & Stratton New York）

Exner, J.E. 1974 *The Rorschach:A comprehensive system. Vol.1.* John Willey & Sons, New York

Exner, J.E. 1978 *The Rorschach:A comprehensive system. Vol.2.* New York:Wiley.

Exner, J.E.& Weiner, I.B. 1982 *The Rorschach:A comprehensive system. Vol.3.* New York:Wiley.

堀見太郎・杉原方・長坂五朗　1958　歴史的発展と意義　本明寛・外林大作（編）　心理診断法双書ロールシャッハ・テスト（Ⅰ）　Pp．1 −39　中山書店

堀見太郎・辻悟・長坂五朗・浜中董香　1958　阪大スケール　本明寛・外林大作（編）　心理診断法双書ロールシャッハ・テスト（Ⅰ）　Pp．144−196　中山書店

カロ研究グループ　1972　カロ・インクブロット・テスト解説　金子書房　P．24.

片口安史　1960　心理診断法詳説　牧書店

片口安史　1974　新・心理診断法　金子書房

クロッパー，B．デイビッドソン，H．H．　河合隼雄（訳）　1964　ロールシャッハ・テクニック入門　ダイヤモンド社　Pp．55− 179.（Klopfer, B., & Davidson, H.H. 1962 *The Rorschach technique-an introductory manual-* New York:Harcourt, Brace & World.）

Klopfer, B., Ainsworth, M.D., Klopfer, W.G. & Holt, R.R. 1954 *Developments in the Rorschach technique Vol.*I. Harcourt,Brace & World,Inc. Pp. 1 −316.

本明寛　1959　ロールシャッハ・テスト，人格診断法　金子書房　Pp．80−85.

村松常雄・村上英治　1958　名大スケール　本明寛・外林大作（編）　心理診断法双書ロールシャッハ・テスト（Ⅰ）　Pp．197−222　中山書店

長坂五朗　1958　ロールシャッハ十余年　ロールシャッハ研究Ⅰ，149 −157.

岡堂哲雄・矢吹章司　1976　ロールシャッハ・テスト入門——知覚分析的アプローチ——日本文化科学社　Pp．127−155.

Phillips, L. & Smith, J.G. 1953 *Rorschach interpretation:Advanced technique.* Grune&Stratton New York Pp．214−255.

ピイオトロフスキー，Z．A．　上芝功博（訳）　1980　知覚分析　新曜社　Pp．214 − 255.（Piotrowski,Z.A. 1957 *Perceptanalysis.* New York:Macmillan .）

Rapaport, D.,Gill, M.M. & Schafer, R. 1968 *Diagnostic psychological testing* (revised edition by Holt, R.R .) International Universities Press New York Pp．394−403.

ロールシャッハ，H．　東京ロールシャッハ研究会（訳）　1958　精神診断学——知覚診断的実験の方法とその結果——牧書店（Rorschach,H. 1921 *Psychodiagnostik* Verlag Hans Huber）

ロールシャッハ，H．　片口安史（訳）　1976　精神診断学（改訂版）金子書房　（Rorschach,H. 1921 *Psychodiagnostik*. Bern:Hans Huber.）

シュハテル，E．G．　空井健三・上芝功博（訳）　1975　ロールシャッハ・テストの体験的基礎　みすず書房　Pp．208－294.　(Schachatel,E.G. 1966 *Experiential foundations of Rorschach's test*. New York:Basic Books.)

空井健三　1970　書評，河合隼雄著：臨床場面におけるロールシャッハ法　ロールシャッハ研究　XⅡ，173－176.

高橋雅春・北村依子　1981　ロールシャッハ診断法　Ⅰ　サイエンス社　Pp．151－160.

辻悟　1978　ロールシャッハ検査法　金子仁郎・原俊夫・保崎秀夫（訳）　現代精神医学体系4A1　精神診断学Ⅰa　Pp．190－256.

（旭川医科大学・心理学）